

第7回 学校卒業後における 障害者の学びの推進に関する有識者会議 意見資料

津田英二
(神戸大学)

本報告の根拠や補足として、添付した以下の2点の資料もご参照ください。

- 「有識者会議第1回～第5回における主な意見にラベルを付し、そのラベルを空間的に配置することで、カテゴリー及びカテゴリー間の関係を捉えようとした図」
- 「学校卒業後における障害者の学びの推進方策 — 主な論点ごとの意見の整理 (Ver.1) — についての意見」

- 人々の学びを支える公共的な機能が劣化してきている。



学習の商品化が進み、「民主主義を支える学習」のための制度が切り詰められてきた。

- 障害者の生涯学習推進を起爆剤にして、人々の学びを支える機能の公共性を再び活性化させることができるか!?

BUT

- 地方自治体レベルで新規事業の恒常的な財源確保、専門職員の養成・配置が可能なのか？

財源問題が、公民館の貸し部屋化、社会教育専門職員の切り詰め、社会教育事業の縮小、施設管理委託などの理由だったが……

- 推進体制の構築と継続的な発展のために、「明らかな成果」が求められるのだとしたら、何を「成果」として捉えたらよいのか？

課題意識と疑問²

こんなふうになったらいいな

障害者の生涯学習推進政策のおかげで、人々の学びを支えるシステムが充実したな♡

学習活動を通して、社会参加できるようになった人が増えたみたい♡

社会参加が難しい人たちの学習について考える人が増えて、住みやすい社会になった気がする♡

多様性に溢れた活気のある共生社会に近づいてきたね♡

障害者が地域の産業の担い手になることで、新しい風が吹いているね♡

元気がなかったまちに、活気が戻ってきたな♡

「のびやかスペースあーち」13年の経験から

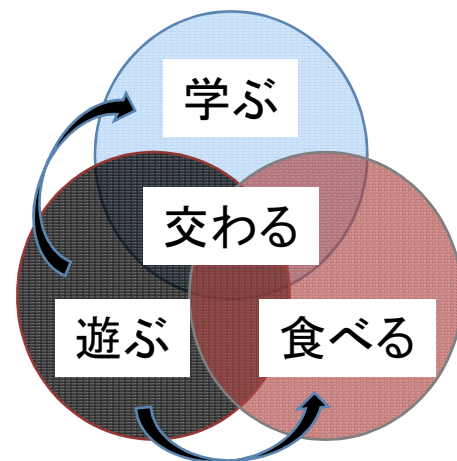
- ◆ 「あーち」は、神戸大学と神戸市との協定に基づいて、神戸大学が運営するサテライト施設です(2005年開設)。 <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>
- ◆ 「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」をめざす社会教育施設。
- ◆ 住民、行政、学生、教職員が協働して、さまざまなプログラムを展開しています。
- ◆ 障害児・者の活動や学びへの挑戦と、すべての人の参加を両立する取り組みを実践してきました。



よる・あーち

金曜の夕方～夜の
特別なプログラム

- ◆ 子どもの頃から通いなれた場所で、日常生活に組み込まれた学びの場として、課題を共有する人々に見守られながら成長していく障害者たち。
- ◆ 学習支援を受けている障害児の姿をみて、改めて「学校でやり残した勉強に取り組みたくなった」青年たちが続出！
 - ◆ 「学習支援」「子ども食堂」のキーワードが入った(2016年～)途端急増した市民と学生の参加。
- ◆ 被支援者から支援者に育っていく保護者たち。



「よる・あーち」のコンセプト

毎週金曜日の「よる・あーち」 ある平均的な日の参加者内訳

乳幼児 3名 小・中学生 12名
青年・成人 10名

(以上の大多数が障害者)

高校生 1名 大学生 8名
大学院生 4名 地域住民 6名
保護者 9名 ヘルパー 4名
教職員 2名 計 59名

「相互学習が生まれる多様な人たちの参加と交流を創出する場づくり」のために

さまざまな次元での学びが起こる場づくり

- ◆ 日常生活に根ざし、生活課題とかかわりながら学べる場
- ◆ それぞれの課題をもちより、多様な人が課題を共有して協力する場
- ◆ 他者の活動する姿から刺激を受け、相互に学びあう場

学習ニーズに応じて学習内容・方法は個別的

- ◆ 学校での学習の不足を取り戻したい人、好きなことをつきつめたい人、社会勉強をしたい人、社会性を高めたい人、生活課題を話したい人……

さまざまな市民(学生を含む)を巻き込む方法

- ◆ 「障害者のために協力して」という論法の限界
- ◆ 社会参加の機会としてのビジョンを市民に提供する必要

「あーち」の実践から生まれた概念 「都市型中間施設」

都市型生活の発展による、機能分化、社会関係の分断・貧困化
(便利さ・快適さの代償)



機能分化した生活を
再統合する媒介機能

属性によって分断された個々人をつ
なぐ媒介機能

例えば「子ども食堂」: 食事は「食べる」という機能を満たすだけでなく、「団らんする」「愛し合う」「躰ける」「教える」機能に関わることが確認された。



高齢者と子ども、障害者と非障害者、勤め人と地域社会……相互の接点を失ってきた社会

「公」と「私」の分断によって見えなくなった問題を再発見する社会的な場

機能分化し専門特化していく社会の諸機能を、生活の次元から再統合する場

例えば、職場でいじめられ、自信と希望を失って失職する障害者の「ひきこもり」を防ぐためにも、「活躍する」と「ひきこもる」の中間が必要。

本人中心の学習について

もうひとつ、議論の記録を
読んでいて気になったこと

障害者による障害者のための学習機会の広がり

- セルフ・アドボカシー、ピープルファースト、本人の会と呼ばれる、知的障害者の自律的な学習活動
- 発達障害者の当事者の会などでの自律的な学習活動
- 自律的な生活に向けた自立生活プログラム


自律的な個人を育てるためにも、自律的な学習活動への着眼も必要だろう

与えられる学習から、自ら取り組む学習へ

そもそも……⁸

生涯学習を「学校の延長」と理解するだけでなく、

自己決定学習をモデルとする成人学習への移行
として理解する。



与える教育から、
学ぼうとする意志を支援する教育へ

課題を与える教育から、
生活に根ざした課題を自ら発見して取り組む教育へ

大切なのは、学習機会の多様性を保障することのできるしくみ！

- 地方公共団体レベルでの「障害者の生涯学習及び文化芸術活動推進会議」設置（教育委員会の主管で）

生涯学習計画等、地域福祉計画、障害者福祉計画に位置づける

- 実態に応じたコーディネート機能：多様な専門性と協働

社会教育主事、公民館職員、
特別支援学校教員、社会福祉協議会職員、自立
支援協議会、親の会、事業所 ……

- 学習メンターの養成・配置

学習者個々人と学習環境をアジャスト！

社会教育士、アクセシビリティリーダー等、
新興の資格の活用を検討！？

- 大学における中等後教育の制度化

・18歳人口の減少に伴う大学のニーズ
・海外の先進事例（thinkcollege.net等参照）

生涯学習支援システムについて¹⁰